(1)は、頭部の形状が方頭をなし、下半を欠損するものである。人名とみられる「丸部」と書かれた面が、植物の根により多少荒れている以外、材の保存状態は良好である。しかし、全体に墨痕が薄く、赤外線テレビを用いても解読できた文字は少ない。

(2)(4)は削屑である。(2)の「仕」の次は「流」か「疏」とみられる。物品名（仕流あるいは仕疏か）＋数量（石・斗を単位とする）を書くが、比較的小さい文字で記載されており、帳簿様木簡の一部とみられる。(3)は保存状態が劣悪な小断片で、四文字分が確認できるが判読はできない。(4)は、文字の残画が一部確認できただけである。

このほか、文字はないが長方形の材の一端を羽子板の柄状に作る封緘木簡状木製品が出土している。頭部を欠損し、両面調整でやや厚みがあること、現状で墨痕が認められないことなどから、未成品である可能性が高い。分割によって二枚一組のセットが作り出される前段階の工程資料であろうか。

本年度出土の木簡からは、詳細な内容を読み取ることはできなかったが、削屑・未成品が出土したことにより、遺跡内部で木簡の製作・再加工が行なわれていたことが明らかになった。

なお、木簡の釈読については、国立歴史民俗博物館の平川南氏よりご教示を得た。

9 関係文献

和島村教育委員会『下ノ西遺跡Ⅱ』（一九九九年）　（田中　靖）

新潟・壱本杉（いっぽんすぎ）遺跡

1 所在地　新潟県北蒲原郡笹神村大字下一分字壱本杉

2 調査期間　一九九七年（平10）一〇月

3 発掘機関　笹神村教育委員会

4 調査担当者　川上貞雄

5 遺跡の種類　集落跡

6 遺跡の年代　平安時代（九世紀～一〇世紀）、中世、近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

壱本杉遺跡は阿賀野川右岸の沖積平野内に位置し、一帯は五頭山塊から福島潟に流れ込む中小河川によって形成された氾濫原が広がる。遺跡は中小河川の一つである折居川右岸の、標高約七mの微高地上に立地し、現況は下一分集落の北東に接する畑地や水田となっている。

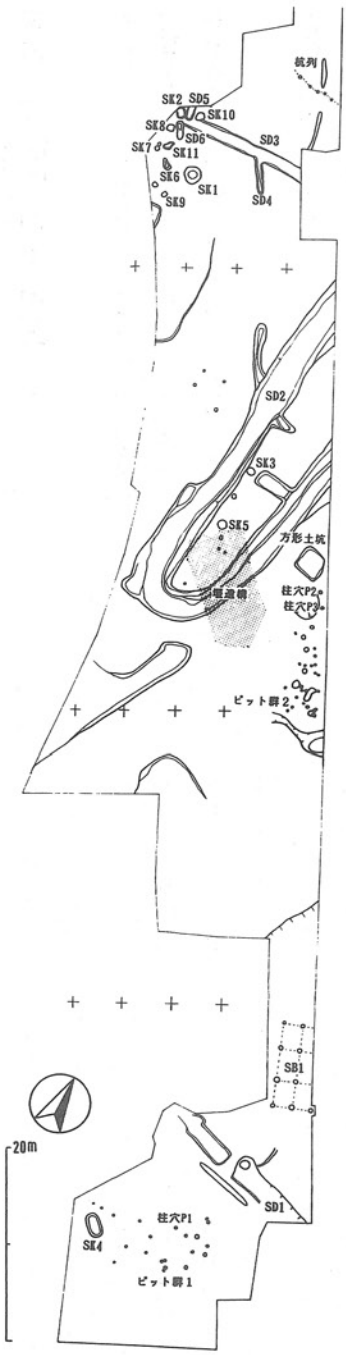
（新発田）

当遺跡は、笹神村史編纂事業に伴う一連の遺跡分布調査の際に、現地踏査によ

って一九九七年に発見されたが、ここが県営圃場整備事業の範囲内にあたることから、緊急発掘調査を実施することとなった。

調査は笹神村教育委員会が主体で、現地踏査の担当者でもあった川上貞雄氏に委託し、一九九七年・九八年の二次にわたり、あわせて二五五〇㎡の調査を実施した。一九九七年度の調査では、古代の掘立柱建物一棟とピット群及び中世のピット群が検出され、当遺跡が平安時代と中世の集落跡であることが判明した。

木簡は一九九七年調査区内の、中世に属すと考えられる方形土坑から出土した。この土坑は二八〇×二六五cmのやや歪んだ方形を呈し、深さ四二cmで平坦な底部を有する。出土遺物はすべて木製品で、木簡のほかに箸状木製品・串状木製品や刀形を呈する木製品など三〇点が出土した。



遺構図

8 木簡の釈文・内容

(1) 「V□蘇民将来子孫也」

60×45×4 032

木簡は上部左右に二重の切り込みをもつ。墨痕は全体的に薄く読み取りにくく、第一字は不明瞭で判読できない。「蘇」は「魚」と「禾」が入れ替わる異体字で、新潟県白根市馬場屋敷遺跡出土の蘇民将来札（本誌第七号）と共通する字体である。

9 関係文献

笹神村教育委員会『県営圃場整備事業長起地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　前田遺跡・壱本杉遺跡』（一九九九年）

（中山俊道）